＜巻頭言にかえて 【特別寄稿】＞

現場教員が教育実践研究に取り組むということ
～現場を触発する教育メディア研究～

木村　明憲（第９期企画委員, 京都市立梅小路小学校）

1.校内研究と教育実践研究

小学校や中学校に勤める現場教員が教育実践研究に取り組むことは非常に意義のあることであると考える。

現在，学校では校内研究という名称で，学校に通う児童・生徒の学力の向上や体力・健康を保持・増進させるために，日常の授業実践を進めている学校が多い。校内研究は，目の前の児童・生徒の現状から出発し，課題を改善するために教員同士がお互いの授業について議論し合ったり，教育委員会の指導主事や大学教員から公開した授業についての助言を受けたりしながら授業改善に取り組む営みである。この様に児童・生徒を中心に据えて取り組む校内研究は，教員の指導力を高めることにも寄与している。

しかし，現在，多忙化する学校で，校内研究に意義を見い出すことができない教員も少なくない。さらに，若年層の教員が増加する中で，校内での児童・生徒の様子や授業づくりについての充実した意見交流をすることが難しい学校もある。このような状況の中，私は，教員一人一人が教育実践研究に取り組む意識をもつことが大切ではないかと思う。

学校の校内研究と教育実践研究は，同じ研究という言葉が用いられるが，異なる側面がある。前述したように校内研究とは，教員同士が議論をし，他者から助言をもらいながら，その学校に通う児童・生徒のよりよい成長を願って行われる。私の経験上，その営みの中に，多数の先行研究を読み深め，それらを基に仮説を立てたり，その仮説を基に単元構想や学習指導案を作成したりすることは少なかった。また，仮説を基に行った授業でデータを収集・分析し，客観的に結論を導き出すことも厳密に行えていたわけではなかった。多くの場合，教員同士で決めた研究主題を基に，それぞれの担任が公開授業を行い，その際の子どもたちの姿を基に，それぞれの教員が思ったことを話し合い，助言を受け，次の授業につなげていた。子どもの姿を基に意見交流をすることは非常に重要なことであるが，一人一人の教員が教育実践研究の知識をもった上で議論をすることで，子どもの姿の見取り方や，先行研究との関連を基に研究が積み重なり，次の授業につながる結論が導き出されるのではないかと考える。

これらのことから，教員が教育実践研究を学ぶことにより，仮説の生成や授業をどのように分析するのかという視点が生まれ，効率よく，そし

て効果的な校内研究が行われるようになるのではないかと考える。

2. 現場教員が教育実践研究に取り組むということ

私は，現場教員が教育実践研究に取り組むことが非常に意義のあることであると考えている。

教員になった 1 年目に 5 年生を担任した。初めての担任で，「どのような授業を進めればよいのか」「何を教えればよいのか」ということに日々悩んでいた。そのような悩みの中で，日々，多様な校務に時間を費やし，十分に教材研究ができないまま授業実践を行っていた。このような授業を繰り返していたこともあってか，学級の状況が日を追うごとに良くない方向へ進んでいった。私は，自らの授業を改善するために，自分が行っている授業，その中での発問，作成したワークシート，学習の流れが本当に良かったのかを検証したいと思うようになった。そこで，自らの授業を評価，検証するために，まず，得意教科であった図画工作科（絵画）の単元構成の検討に取り組むことにした。当時，私は，大学時代の恩師の縁もあり，日本美術教育学会に所属しており，学会の先生から，研究的な助言を得ることができたからだ。図画工作科の授業で児童のワークシートを分析し，児童がかいたワークシートの記述と絵を比較しながら，授業で行った支援がどの程度有効であったのかを検討した。この様に，自分自身の指導・支援を分析することにより，どの指導・支援が効果的であったのか，またどこに課題があったのかが明確になり，次の授業の授業設計に活かすことができた。この経験をきっかけとして，私は，教育実践研究に取り組むことが，自らの授業改善に繋がると確信した。

その後，京都市総合教育センターの研究課に情報教育及び ICT 活用の研究員として赴任したことから，教育メディア研究に携わることとなった。

3. 現場を触発する教育メディア研究

私が教育メディア研究に携わるようになり 10 年が経つ。はじめは実践したことを振り返り，次の実践に活かすことを目的に，研究を行っていたが，月日が経つにつれ，実践で得た知見をどのようにすれば一般化することができるのかを考えるようになった。その様に考え取り組んだはじめの研究が「情報活用の実践力の育成を意図した自主学習における学習支援カードの活用と効果」木村ほか（2016）である。この論文では，情報活用の実践力を育成するために開発した「学習支援カード」を児童に配付し，家庭での自主学習で参照させたことによる効果を検証した。実践の段階で，児童がカードを参照することで，自らの問いを主体的に追究する自主学習ができるようになったと感じていた。私は，そのような子どもたちの姿を目の当たりにし，このカ

ードを一般化することで多くの子どもたちが主体的に学べるのではないかと考え，この研究に取り組むことにしたのである。この研究では，児童が 1 年間取り組んだノートの記述と学習支援カードの整理番号を対応させ，カードに示された学習活動がどの程度行われたのか，また，カードを活用して学習を行ったことに対して子どもたちがどのような意識をもっていたのかについて調査し，分析をした。このように研究的な視点から，実践を見ることにより，開発した学習支援カードを活用した実践が児童の情報活用の実践力を高めたことに改めて気づくことができた。研究的な視点で実践を分析し検証することにより，自らの実践の成果や課題を把握することができたのである。

次に，研究で得た成果を，様々な学校現場に伝えることで，子どもたちが主体的に楽しく学ぶ授業を広げたいと考えた。そこで執筆したのが，木村（2016）「情報学習支援ツール」である。この書籍には，木村ほか（2016）の論文を，現場で働く教員がわかりやすく，すぐに実践に活かすことができるように執筆した。このように，論文の内容を基に書籍を執筆し出版することで，私自身の教育に対する考え方が明確になるとともに，これまで，学校や所属する教育委員会以外の教員とのつながりがもてるようになった。このような新たなつながりをもち，様々な教員と教育に対する考え方を交流することにより，自分の考えを深化させることができた。

その後，自らの実践を振り返り，次に繋げるために，教育メディア研究を継続し，2 本の論文を書いた。1 本目の論文は，京都教育大学附属桃山小学校が開発した新教科「メディア・コミュニケーション科」の教科用図書の開発についてである（木村・浅井 2017）。この研究を通して，学校の校内研究を教育メディア研究の視点から振り返り，校内研究の成果を調査結果の分析を通して明らかにすることができた。ここで得た成果が，根拠となりその後の校内研究に，現在も活かされている。

2 本目の論文は，勤務校とオーストラリアの小学校で ICT を活用した国際交流を実施したことによる効果について検討した（木村ほか 2020）。この研究を通して，タブレット PC を活用し探究的に学ぶことが児童の交流に対する意識を高めるということが明らかになった。

このような研究成果が明らかになることで，校内研究や新しい授業実践の進め方を明確にすることができたと考えている。

4. 研究がもたらす実践のバージョンアップ

私は，教育メディア研究に取り組むことにより，自らの実践を分析し，その実践の成果と課題を浮き彫りにして来た。そのように実践を客観視することで，そこで気づいた成果や課題を次の実践へ活かし，実践をバー

ジョンアップさせることができた。このバージョンアップは，自分だけの力ではなく，学会や論文投稿，書籍の出版を通して得た繋がりによってもたらされた他者との関わりから生まれたものである。

現場教員が教育メディア研究に取り組むことで，自らの実践を振り返り実践の成果と課題を明確にすることができる。さらに，研究を通して生まれる人との関わりの中で新たな価値が創造されていくと考えている。

参　考　文　献

木村明憲（2016）情報学習支援ツール，さくら社

木村明憲，高橋純，堀田龍也（2016）情報活用の実践力の育成を意図した自主学習における学習支援カードの活用と効果，教育情報研究 Vol.32 No.2,p25-36

木村明憲，浅井和行（2017）児童の情報活用能力を育成するために開発した教科用図書の活用が「メディア・コミュニケーション科」の理解に及ぼす効果，教育メディア研究 Vol.25 No,1,p61-74

木村明憲，黒上晴夫，谷口生歩（2020）小学校でのタブレットPCを活用した国際交流による資質・能力の変容，教育メディア研究，Vol.25 No.2,p1-17